

Title	イエスの示したように苦しみ、また仕える：災害後の意味形成について(主題講演(第一日目 二月十五日))
Author(s)	Juan, Martinez 加藤, 喜之・訳
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 27-43
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5334
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

【第二回東日本大震災国際神学シンポジウム】

主題講演（第一日目 二月一五日）

イエスの示したように苦しみ、また仕える

——災害後の意味形成について

ホアン・マルティネス

加藤喜之・訳

二〇一一年三月一日の大震災からすでに三年が経ちました。今回のイベントで、災害以後毎年開催されてきたシンポジウムも、その終わりを遂げようとしています。過去のシンポジウムを通して皆さんと共に時間を過ごすことができ、また、今回も大震災と復興の経過について、共に考えることができることを心よりうれしく思っています。

この講演を始めるにあたって、まず、皆さんがこの場に集まっているという事実の重要性に注目したいと思います。日本のキリスト者が今回の大震災で見せた応答は、近代日本のキリスト教史において、初めてのことだったのでないでしょうか。この三年にもわたるシンポジウムは、異なつた神学的背景をもつ人たちが、日本の社会においてキリスト者として生きる意味について、真剣に、また共に考えているという力強い証しとなりました。これは素晴らしいニュースであります。

ひとが災害、特に被害が甚大な災害を経験するとき、その経験の固有性に目を向けがちです。もちろん多くの意味

で、状況は人それぞれであり、固有性があります。事実、三月十一日の災害は、日本と日本のキリスト教会に固有の状況を作りだしました。しかし、時間が経つにつれ、その固有性のみならず、他の災害の経験との共同性を認識することが重要になってきます。なぜでしょうか。すべての苦しみはそれ独自、そして個人的なものではありませんが、苦しみというものは人類すべてに共通するものであります。この共同・共通性のゆえ、私たちはお互いの苦しみについて語りことができ、またお互いに学び合うことができます。だからこそ皆さんが自身の経験を語り、それを繰り返し語り、それが重要なのです。そのプロセスの中で、他者とながら合うことができ、同時に、人類を救いに導く神のご計画のうちにこの災害の経験を見いだすことができますようになります。なぜなら、ものを語ることに由来事を再解釈するという行為は、私たちの固有な経験に俯瞰的な意味を与えてくれるからです。

時間が経つにつれ、物事の見方は変化します。そしてその観点の変化は、自己の形成に重要な役割を果たす大災害のような出来事を解釈する方法に、影響を及ぼすこととなります。この三度目のシンポジウムで、私は「繰り返し語る」という行為に、焦点を当てたいと思います。人間という生き物は、その歴史の中で幾度も重要な出来事に立ち返り、新しい状況に合わせた解釈を与えてきました。このことについてキリスト教の聖典が、重要なモデルを与えてくれるのは明白です。特に旧約聖書をひもといてみると、イスラエルが神によるアブラハムの召し、エジプトからの救出、そして捕囚といったアイデンティティの形成の中核を占める出来事を幾度となく語り、再解釈しているのを見ることが出来ます。新しい状況に直面したイスラエルが、神によって過去になされた業を再度思い描くことによつて、現在の問題を理解することができるようになるのです。聖書は、このプロセスが、現在の状況と私たちが告白する過去に起きた神の介入を結びつけることができると記しています。同時にこれは、現在の状況がいつの日にか、同様に解釈されうるという希望を与えるものです。そして聖書の記述は、現在の状況を解釈する枠組みを与えることのみならず、苦しみからの回復のプロセスの中で、神は常に私たちと共にいてくださるといふことを信じるように招いているのです。

そういうわけで、大震災から三年が経った今こそ、キリスト者がどのようにあの災害に応答したかを語り直すべきではないでしょうか。もちろんこのことは痛みを伴うでしょうが、同時に、あの災害で見せた勇氣、献身、そして犠牲を思い起こすことにもなるでしょう。しかし、このプロセスを行う最も重要な理由は、神の臨在のうちにあの震災を語り直すことにあります。苦しみは、この世界における神の働きという枠組みの中で語られることになり、このことは皆さんが、キリストの名によって他の人々に仕えていくための大きな原動力となることでしょう。

このプロセスにおいて私が今日できる小さな貢献は、苦しみの渦中における神の臨在というレンズを通して、震災の経験を再吟味する作業に皆さんをお招きすることだけです。震災の現場に私はいませんでした。また私は、日本人ではありません。そしてこのような規模の災害を経験したこともありません。それゆえ、私ができる最善のことは、他の人々の経験を指し示すことによつて、そこから皆さんとともに学んでいくことです。

大震災のような災害を体験する時、ひとは苦しむと同時に、苦しんでいる他者に仕えるという機会を得ることができず。イエス・キリストに従うものとして、私たちは苦しみと奉仕という二つの行為が、キリストにあつて一つになっているということに気づかされます。同時に、この二つの行為は、キリストの名のもとでなされる私たちの働きのうちにおいても、一つとなつていなくてはなりません。

本日の講演では、まずキリストが示した苦しみと奉仕のつながりについて考えていきたいと思ひます。また、苦しみからどのような神学的な教訓を得ることができるのか、という問いについて考えてみたいと思ひます。最後に、苦しみについて語るという行為がいかに回復のプロセスに重要かを考えていきます。私は、再洗礼派というキリスト教の伝統に属していますので、この伝統から多くの示唆を受けてきました。またこの伝統が与える視点のもとで、私は問題の枠組みを設定しています。もちろん、再洗礼派が理想と掲げている信仰と彼らの実際の生活が乖離している事実を、私は認めます。ただ、再洗礼派が他のクリスチャンと同様に墮落していることは認めますが、再洗礼派の神学こそが、苦し

みと奉仕の交差点を真剣に考える鍵を与えてくれるものだと思っています。それゆえ、再洗礼派の理解が、皆さんの過去と未来を理解する助けになることを期待しています。再洗礼派でない皆さんは、ぜひ自身の神学的な伝統を通して苦しみと奉仕をつなげることができるか試してみてください。それに加えて、カトリック神学者のヘンリ・ナウエンの思想を通して、災害の中で意味と希望を見つけるにあたって、追憶 (remembering) の果たす重要な役割について考えてみたいと思います。

弟子訓練——イエスの示された苦しみと奉仕

再洗礼派が理解する苦しみと奉仕のつながりについて記されたもので、メノ・シモンズのことばほど優れたものはないでしょう。シモンズは現在のオランダにあたる地域出身の一六世紀の司祭であり、宗教改革の思想に改宗したことによつてあざけり的になり、最終的には献身の素晴らしい例を後世に示すことになりました。もちろん、彼の名声が後世に伝わったのは、殉教者とならずに長生きをした数少ない再洗礼派のリーダーのひとりであったことにも起因しています。シモンズは信仰について、次のように書いています。

真の福音的信仰とは、休眠するような性質のものではない。その姿は、いつさいの正義と愛の行いのうちに表される。肉と血にあつて死に、許されざる欲求と欲望を破壊する。心から神を求め、仕え、畏れる。裸の者には服をきせ、飢えた人々には食べ物を与える。砕かれたものを慰め、困窮した人々をかくまう。虐げられたものを慰め、悪には善をもつて返す。傷つけるものに仕え、迫害するもののために祈る。神のことばに

よって教え、忠告し、戒める。失われたものを探し、負傷したものには包帯を当てる。病気のものを癒し、正しいものを建て上げる。すべての人に対してすべてのものとなる。主の真理のために起こる迫害、困難、苦悩は、榮譽ある喜びと慰めとなる。⁽¹⁾

多くのメノー派の人々にとって「真の福音的信仰」という代表歌となっていることばは、明瞭に奉仕と苦しみを信仰者が成長する姿に結びつけています。ローマ・カトリック教会とルターらの権威主義的な宗教改革者たちが、教義や典礼的な教会のしるしについて議論を重ねていた間、再洗礼派はイエス・キリストに献身した人々のうちに生じる神の働きの実に焦点を当てていました。このシモンズのことばの中で鍵となるのは、「すべての人にすべてのものとなる」という箇所です。再洗礼派の伝統において、最も明確な福音的な信仰のしるしは、必要のある者のために仕えることです。たとえ、その人が危害をもたらすことがあったとしてもそうなのです。シモンズは次のようにも語っています。

我こそは神のことばをもつ真のキリスト教会なのだ、と誇る人々の偽善ほど、悲しく許し難いものはない。彼らは自分が真のキリスト教のしるしを喪失していることに気づかないのだろうか……彼らは、貧しく苦しんでいる自分の身体の一部である兄弟、すなわち、ともにひとつの洗礼を受け、また同じパンに与る兄弟たちを苦しめているのだ。貧しく、腹を空かせ、苦しみ、歳をとり、足が不自由な、盲目で病んでいる人々に施しを求めさせ、玄関先で物乞いをさせているのだ。⁽²⁾

再洗礼派は一六世紀の苦しみと迫害のうちに生まれた教派であったので、その信奉者は早い段階から先述のような問題や、その実践的な意義について考えなくてはなりません。それゆえ苦しみという概念は、再洗礼派の観点からキ

リストに従う人々にとって重要な神学的な枠組み、そして特徴となつたのです。それでは、苦しみとそれへの応答方法についての彼らの考察のうちで、重要なポイントをいくつか見ていきましょう。

一つ目は、苦しむことは、不思議なことではないということです。苦しみは人間の存在条件の一つであり、また、特にリストに従おうとするものは覚悟すべきものであります。もし私たちに苦しむ準備ができていないのであれば、この人生を生きるばかりか、リストに従う準備さえできていないことになります。これは、運命論や不可避の観点を語っているではありません。そうではなく、善人が苦しみ、すべての人に悪が降りかかるというこの不完全な世界に生きているという告白なのです。

もちろんこの苦しみの理解には、深遠な神学が潜んでいます。不完全な創造の理由やこの世においてどのように悪が存在するか、といった複雑で痛みを伴う問いを問う時もあるでしょう。しかし真の信仰は、思弁的ではなく、実践的に人々の必要に応答するコミットメントから始まるのではないのでしょうか。苦しみを解消しようと努力したとしても、この世において苦しみは、迫害、不正義、自然災害、人的災害といったかたちで継続するということを知ります。もちろん、私たちはよりよい世界にするために働き続けなくてはなりませんし、そうすべきであります。しかし、人間的な努力によつては、苦しみが一掃されることはありません。

二つ目のポイントは、苦しみはリストの救済の働きの重要な一部であるということです。リストの救いは、私たちの苦しみを取り去ってくれるものです。十字架は、命をもたらす方法であるばかりか、リストに従うものが歩むべき人生の道でもあります。再洗礼派の考えによると、もしリストとともに、その名のために苦しむ決意がないのであれば、リストに従うという意味を理解してないとされます。一六世紀初頭にドイツで活躍したハンス・デンクは次のように記しています。「彼に従うことなしに、彼を知ることではできない。彼を最初に知らなくては、彼に従うことはできない」⁽³⁾。

権威主義的な宗教改革者たちが真の教会のしるしについて議論を重ねている間に、奉仕と苦しみは再洗礼派にとって忠実な教会のしるしとなりました。これは教義的な声明ではなく、特に何千もの再洗礼派の人々が己の信仰のために殉教者となった最初の数世代にとつては、この運動の生き生きとした経験そのものでした。

教会史において、苦しみを理想化し儀式化した人々や運動があったことは否めません。再洗礼派もまたこの傾向から逃れることはできませんでした。しかし奉仕を苦しみに結びつけることを通して、苦しみを目的化することを回避し、十字架こそがイエスの示した道の中心にあることを確認することができます。今日においても、メノー派の多くの家庭には『殉教者の鏡』(Martys' Mirror)があります。ちなみに、私も研究室に一冊置いてあります。この本は、古代から始まる教会史における殉教者の話を集めたものであり、その大部分を初期再洗礼派の殉教者の話が占めています。なかでも一番重要で、繰り返し語られてきたのが、デイルク・ウイレムスの話です。

ウイレムスは、一六世紀に生きた再洗礼派のひとりでしたが、信仰のために投獄されてしまいました。しかしある時、様々な理由により、彼は牢獄から逃げることでできたのです。看守が追いかけてくる中、ウイレムスは凍った池の上を走り抜けました。しかしその看守は、ウイレムスよりも体重が重かったため、氷が割れ池の中に落ち、命の危機に瀕しました。そこでウイレムスは看守のところへ戻り、彼を助けました。しかしそのために、牢獄に引き戻されることになり、最終的に殉教することになったのです。

『殉教者の鏡』、そしてこのウイレムスの話は特に、苦しみを理解する解釈学的な鍵として重要な役割を果たしてくれます。再洗礼派の人たちがこのような話をお互いに語り続けるのは、自分たちの信仰に表現を与えることになった根源的な苦難の経験に、立ち戻らせてくれるからなのです。同様に、現代に生きる私たちにとつて重要なことは、その代価の大きさにかかわらず、キリストに従うことを選んだ人々の苦しみと奉仕の話を、繰り返し語ることでないでしょうか。この繰り返し語る行為が、私たちに忠実さの代価を思い出させ、また私たち自身の経験を、現代において忠実であ

ることの重要性につなげることになるのです。

三つ目に考えるべきことは、もしキリストの道が十字架の道であるのなら、苦しみと奉仕の交差点は、私たちの生活の中で神の臨在を見いだす重要な場所であるということです。神は私たちの苦しみのうちに働き、痛みの中にあっても神の働きを認識するよう招いておられます。もちろん、この認識は簡単なことではありません。特に苦しみがどうしようもなく大きいときには、実行するのは難しいでしょう。

再洗礼派の人たちは、戦争や迫害は間違っていると考えていましたが、自分たちに対する不正や迫害に対してはそれほど声を上げることはありませんでした。苦しみはイエス・キリストに従う者たちが避けて通ることのできない道だということを受け入れていたのです。彼らにとって重要だったのは、その苦しみに対してキリスト者としてどのように応答するかということでした。キリスト者であってもなくても必要がある人がいたのであれば、理由や結果を計ることなく助けるべきだと考えていました。

また再洗礼派の人たちにとって、苦しみは個人の経験ではなく、共同体の中で起こる公共の経験でした。キリストのための苦しみや奉仕の証しを、繰り返し語ることによって、彼らはその経験の意味を見いだしていききました。聖書を自分たちの苦しみの経験という光を通して読む時、彼らはキリストの名のために迫害を受けたすべての神の民との歴史的な継続性を見いだすことができたのです。繰り返し語ることによって、自分たちの信仰を再確認することができ、また苦しみに意味を与えることができるというわけです。この共同体の経験が意味をもったのは、イエスの苦しみに似たものとされたからでした。つまり彼らは、イエスの示したように苦しみ、また仕えていたのです。

ロバート・フリードマンは『再洗礼派の神学』の中で、一六世紀の再洗礼派の運動には明確な神学のシステムはなかったと記しています。⁽⁴⁾ 当時の再洗礼派は、人生と信仰が密接な関係をもった実存的なキリスト教を表現していたとも論じています。彼らは、厳密な教義を求めた宗教改革者たちやローマ・カトリック教会のようではなく、イエスの示

した道を生きること全霊を傾けていたのです。イエスへの献身は、友人や迫害者、再洗礼派、キリスト者であるかどうかにかかわらず、他者の苦しみに対して応答することを意味していました。

このような種類の応答は、具体的なものが求められ、神の与えたものすべてを使うことが求められました。フープマイヤーは次のように記しています。

それぞれ隣人のために世話をしなくてはならない。それゆえ、空腹の者は満たされ、渇く者は潤され、裸の者には服が与えられるように。なぜなら私たちは自分の所有物の主ではなく、管理人であり世話役であるからだ。⁽⁵⁾

一六世紀のヨーロッパ社会にとつて、この思想は危険なものでした。再洗礼派は、キリスト者であつたら必要のある者に対して奉仕しなくてはならないと考えていたのです。さらにフッター派の人たちは、すべての財産の共有を提唱しました。他の多くの再洗礼派の人々は、フッター派ほどラディカルになりませんでした。物を共有すること、すべての人のために物が行き届くことの重要性は認識していました。実践的には、共同体が相互保険のように機能していたのです。つまりどのような苦しみであつても、一人または一族で耐え忍ぶのではなく、共同体で共に苦しむべきであると理解されていたのです。他人の必要を世話することは、ただの奉仕ではなく、証しでもありました。そして真の回心のしるしは、代価にかかわらず、喜んで他者に仕える気持ちであると、彼らは理解していました。

苦しみから学ぶ

キリスト者として、いくつかの種類の苦しみは救済的であると告白することができます。この仮定には、再洗礼派の神学が前提としてあります。どういうことでしょうか。神が世界のうちで働き、神の働きの中にはイエス・キリストの人格と業があります。また、キリストは、十字架上での苦しみを通してご自身の業をなされました。それゆえ私たちは、十字架と神の働きにつなげられている苦しみを、明確に救済的だと告白することができます。もちろん多くの人間の苦しみは、このカテゴリーの中で理解されるものでないことは認識しています。しかしキリスト者として、私たちは、神がすべての人間の苦しみを——それがたとえ明確に不義、不正、手に負えないものであったとしても——救済してくださると告白します。次に苦しみが救済的になるいくつかの方法を提示してみしましょう。

1. キリストのためになされた苦しみ
2. キリストの名にあつて他者の奉仕のためになされた苦しみ
3. キリストの苦しみに連なる苦しみ
4. 神が神の似姿に私たちを変化させるために用いられた苦しみ
5. 神の臨在と復活の希望を思いつつ乗り越えられた苦しみ

実践的な問題は、現実にかかる苦しみのうち、あるものは他のものよりも、上記のカテゴリーのいずれかに当てはまり

やすいということでありませう。もう一つの重要な問題は、解釈の問題にあります。どのように人間の経験の中の苦しみの役割と実体を、理解することができるのでしょうか。上記のリストを一つひとつ見ていくと、これらは、イエスに從う意味と人間の経験の理解につながっているのがわかります。

キリスト教の伝統の多くは、独自の迫害の物語や、信仰のために苦しみを受けた人たちの証しをもっています。また今日でも世界各地で、キリスト者であることのゆえに苦しみ死んでいく人の数は増加しています。このような苦しみを、救済的な苦しみと名付けることができるのではないのでしょうか。再洗礼派の人々は、信仰のために苦しむことがなければ、キリスト者としての証しが不明確で一貫性のないものではないか、と尋ねることでしょう。

キリストを証しするために苦しみ死ぬ人々、キリストのために危険の中に身をおく人々を、私たち自身は信仰のために殉教者になる覚悟はないでしょうが、尊敬し模範としています。しかし、他者の必要や苦しみのために奉仕することを、キリストにある苦しみであると私たちは認識していません。キリスト者が宣教や奉仕にその人生を捧げる時、それは一種の犠牲を伴う苦しみとして理解することができます。これは他者のためにキリストになることでもあり、残り物を捧げるのではなく、自分の存在の中心にあるものをすべてキリストの名のために捧げることもありません。

また同時に、私たちに与えられた重要な任務に、人々が経験している苦しみを贖うということがあります。どういうことでしょうか。苦しみがそれ自身の目的になるときや、苦しみを解釈する理論的な枠組みがないとき、苦しみは簡単に運命として片付けられてしまいます。そして、意味のないものとして理解されてしまいます。だからこそ、災害とそれへの応答の話を繰り返すことによって、皆さんは苦しみの中にいる人たちに、彼らの苦しみのもつ意味を示唆することができのです。この意味を作りだす作業を可能にするには、私たち自身が、神が私たちの生活の中で働くことを許し、また神の臨在と未来の希望の中に歩むことが求められます。そのためには、人間の歴史に展開する神の壮大な

物語と働きの中に私たちの物語をつなげなければなりません。

苦しみの物語を語る

ヘンリー・ナウエンは *The Living Reminder* の中で、痛み、罪、苦しみといった経験を思い出させ、繰り返し語り続けることは、牧会の重要な役割であると書いています。ナウエンによると、牧会者の仕事は、苦しみの経験を繰り返し語る人々と共に歩むことよって、癒しとなり、持続的な導き手となることにあります。これら一つひとつの様相は、私たちに、苦しみと痛みの経験を理解する重要な枠組みを与えてくれます。ナウエンは次のようにも記しています。

おそらく、私たちの人生に起こる一つひとつの出来事は、それらが人生の物語という全体性をかたちづくるのに与える影響にくらべれば重要ではない。人々は似たような病氣、事故、成功、驚きを経験しても、状況によつてずいぶんと違ったかたちで覚えている。また人々の自己認識の源泉は、何が実際に起こったかということよりも、どのようにそれらを覚えているか、またそれらを自分の人生の中でどのように位置づけるか、ということにある。⁽⁶⁾

ナウエンによると、牧会をしていて信徒のうちに頻繁に見いだすことのできる問題として、記憶による苦しみというものがあるそうです。これは、痛みや苦しみの記憶をなんとかして忘れようと努力するプロセスの中で体験する苦しみです。牧会者としてなすべきことは、この痛みを消すことに努力を注ぐのではなく、主の苦しみという、より大きな悲し

みのうちに位置づけることであると云っています。

人間の物語を苦しみの従者であるイエス・キリストの物語に結びつけることによって、私たちの人生を運命という鎖から解き放つことができる。また、私たちのもつ時間の概念を、クロノスからカイロスへ変えることができる。これはつまり、相互関係のない出来事や偶然性に牛耳られた人生から、私たちの人生のうちに働く神を発見することができるようになるということである。⁽⁷⁾

私たちの苦しみをキリストの苦しみのうちに見いだすことによって、私たちの人生さえもキリストの働きとキリストの臨在の約束によって守られているということを理解できるようになります。キリストの姿を見ることができなくとも、聖霊の臨在を通してキリストが共にいることを知ることができます。だからこそ、「痛みや苦難の中にあつても、悲しみのうちに隠されている新しいいのちのしるしや喜びを見いだすことができる」とパウエンは語るのです。⁽⁸⁾それはつまり、過去を振り返るといふ行為を通して、聖霊にある新しいいのちと神がたゆまず励ましてくださっているという事実を、経験することができるといふことなのです。同時に、神は私たちの人生のうちに新しいものを創り続けており、新しくされた未来に導いてくださっていることも知ることができます。

パウエンは、「よい記憶はよい導きを与えてくれる」と語っています。なぜなら、私たちの希望は、記憶の上に建て上げられているからです。特にキリストの記憶は、「破綻しかけている文化、弱体化した社会、そして暗闇にみちた世界の中で、希望と自信を与えてくれる」のです。⁽⁹⁾そして、このリストに災害による痛みを加えることができるでしょう。

私たちが繰り返し災害におけるそれぞれの経験を語るとき、リーダーは次の二つのことをすべきです。一方で、大震災において日本のキリスト者が成したことは、信仰の実践の完全なかたちであったと考える誘惑に気づかせることです。また他方で、苦しみと奉仕へ押し出してくださいださるイエスの召しを、最も的確に体現している震災時の出来事に焦点を当て、繰り返し語るように励ますことです。記憶を思い出し、繰り返し語ることによって、苦しみの中にある人のために神の牧者として奉仕することができるのです。

前に進むということ

三月一日の大災害という過去を捉える視点をもつことができるようになったら、神がいかに苦しみと奉仕のうちにいてくださったかという自分自身の記憶や証しを紡ぎだすとよいでしょう。私は、信仰を告白し、また神を礼拝し、神の働きを一人ひとりの人生のうちに見いだすために、お互いに自分の証しを語り合うことを重視するラテン系の教会の出身です。証しというのは、私たちの信仰を言い表し、それを日々の生活の中に結びつけるよい機会を与えてくれます。また証しを通して、私たちは、「神は私たちのうちに働いており、またあなたも働いておられる」というメッセージを、教会の外の人たちに語りかけることができます。

だからこそ、皆さんの成し遂げようとしていることが重要なのです。もちろん痛みや死について語ることは必要でしょう。災害について繰り返し語ることの一部分として、「悲嘆のプロセス」があるのは事実です。災害時の対応で後悔していることを思い出し、状況をコントロールすることは不可能であったことを知ってください。繰り返し語ることで、私たちの限界を知ることができ、神により頼む必要性を知ることができます。

同時に、災害時の奉仕と犠牲の証しも語られなくてはなりません。どのように他者の必要に人々は答え、危険や損失、また自分の命さえも顧みず、他者の命のために尽くしたのでしょうか。これらの証しにあわせて、災害の中でどのように人々は神への回心を経験し、神と出会ったのかを証ししてもらいましょう。日本中で、また特に被害が大きかった場所で、苦しみの中、そして他者の必要に答えた人たちの愛を通して、イエス・キリストと出会った人たちがいます。この人たちの話は、神がどのようにして災害を光に変え、多くのキリスト者の信仰と証しを刷新したのかを教えてください。くれるはずです。

三月一日の大震災とその影響は、他人のために仕えることを望む人々を集めました。それはボランティアであったり、グラス一杯の水を差し出した近所の一人であったかもしれません。繰り返し語られることばを通して、人々がどのように共に働き、必要のある人々に共に手を差し伸べたかを知ることができるようです。彼らの話を通して、どのようにして人々はお互いを理解して、様々な違いをもちつつも、他者のために仕えるという献身的な生き方に成長したのか、がわかるはずです。特にキリスト者は、現代の日本社会の中でキリスト者のあるべき新しい姿を学んだはずです。それをお互いに語り合ってください。

津波は防波堤を破壊しただけではありません。災害時の皆さんの対応は、この大震災が、これまで日本のキリスト教会に存在した教派の壁、また教会と日本社会の壁を破壊したことの証明になっていないでしょうか。様々な活動はまだ進行中であり、ほんのわずかな証ししかできないかもしれません。古い壁がどのように破壊され、新しい人間関係や宣教のコミットメントが生まれたかをはつきりと語るには、まだまだ年月が必要かもしれません。

しかし、震災について語られることばは、災害が人々に与えた影響に対して、人間が何をするのができ、何をすべきか教えてくれます。また、大震災について語ることは、被造物を管理する人間の責任という非常に複雑な問題に目を向けさせてくれます。この問題にキリスト者は、どのように答えればよいのでしょうか。また、どのようにこの災害

は、被造物の管理者として神に召された人間についての、新しい物語や対話を生むことができるのでしょうか。

そして私たちの語りは、死の問題についても触れなくてはなりません。災害に直面するということは、私たちには死ぬ可能性があるということを中心に認識することになります。災害時であっても、病気によつてでも、また老齢であっても、私たちは死にます。しかし死を深く認識することは、同時に、「身体のみがえりとこしえのいのちを信」じる信仰を私たちがもっていることを、世界に宣言する機会が与えられたことでもあるのです。

最後に、災害時に何があつたかを分かち合うことは、今日でもまだ多くの仕事が残されていることを理解するきっかけにもなります。これから日本の教会は、どのようにして日本社会のよき奉仕者になることができるでしょうか。どのようにして日本の異なる伝統をもつた教会が共に働くことを通して、よき証しを社会に立てることができるでしょうか。どうか。災害時、また災害の後、神の働きをどこに見いだすことができるでしょうか。日本社会は、大震災を経たことによつて、どのように変化し、またその変化のプロセスに教会はどのように携わることができたのでしょうか。これらの問いを問うことによつて、私たちの語りが未来への方向性をもつ助けになり、そして日本の諸教会がより忠実に神の宣教に携わることができるようになります。

このプロセスを通して、私たちの語りと、苦しんだ人々、仕えた人々、また苦しみ仕えた人々の語りをともに、イエス・キリストの奉仕と苦しみ、そしてこの世界における神の働きにつないでいくことができます。これらの語りは、地理的そして歴史的な隔たりを超えた信仰者の語りにつながれていきます。そのことを通して、私たちはキリストの示した道にあつて歩み続けることができますのです。

註

- (1) “The Reasons Why Menno Simon Does Not Cease Teaching and Writing” published in *The Complete Works of Menno Simon*, Aylmer, Ontario and Lagrange (Indiana: Pathway Publishers, 1983), p. 246 参照。
- (2) “True Christian Faith” in *Anabaptism in Outline*, Walter Klaassen, editor: Kitchener (Ontario & Scottdale, Pennsylvania: Herald Press, 1981), p. 241 参照。
- (3) “The Contention that Scripture Says,” *Anabaptism*, p. 87.
- (4) Robert Friedmann, *The Theology of Anabaptism* (Kitchener, Ontario & Scottdale, Pennsylvania: Herald Press, 1973), pp. 27-34.
- (5) ミンタキーン・フープトヤーの引用。“Conversation on Zwingli’s Book on Baptism” *Anabaptism*, p. 233 以下。
- (6) Henri Nouwen, *The Living Reminder Service and Prayer in Memory of Jesus Christ* (New York: Harper San Francisco, 2009), p. 19.
- (7) 同十’ p. 25.
- (8) 同十’ p. 47.
- (9) 同十’ p. 59, 62.